

# 山形県連小会報

## 特集号

発行日 令和6年8月23日  
 発行者 山形県連合小学校長会  
 樋口 潤一  
 山形市木の実町12-37  
 県教育会館(大手門バルズ)

## 第78回 山形県連合小学校長会研究協議会開催される



### 大会日程

6月14日(金) ヒルズサンピア山形

9:30~10:00  
 ◇受付

10:00 ◇全体会  
 ○役員紹介

- 1 開会のあいさつ  
阿彦 淳 実行委員長
- 2 国歌・県民歌斉唱
- 3 会長あいさつ  
樋口 潤一 会長
- 4 来賓あいさつ  
山形県教育委員会教育長  
高橋 広樹 様
- 5 来賓紹介 大沼 清司 幹事長
- 6 大会宣言 鈴木 伸治 研修委員長
- 7 閉会のあいさつ  
佐竹 康弘  
R7年度実行委員長

○諸連絡

10:30 (休憩)

10:45 ◇研修 I  
 講演 「AI時代の人間の価値と教育」  
 講師 富田 勝氏  
 (慶應義塾大学先端生命科学研究所前所長 慶應義塾大学名誉教授)

12:20 ◇連絡

12:40 ◇昼食休憩

13:40 ◇研修 II  
 分科会

15:40





## 会長あいさつ

山形県連合小学校長会

会長 樋口 潤 一

本日、第78回山形県連合小学校長会研究協議会を、山形県教育委員会教育長代理教育次長 加藤淳一様をはじめ、多くのご来賓の皆様をお迎えし、ここヒルズサンピア山形において5年ぶりに開催できますことを、会員の皆様と共に喜び申し上げます。本当にありがとうございます。

昨年度は、第63回東北連合小学校長会山形大会を東北各県から約1000名のご参加をいただき、成功裏に開催することができました。東北連小会長の重責を担われた村上ゆかり前会長様をはじめ、ご勇退なされた多くの先輩方も含めて、ご尽力いただいた皆様方に改めて心から敬意を表し、深く感謝申し上げます。

さて、今年度の山形県内の小学校数は、昨年度よりも2校減り221校となりました。平成20年度が322校でしたので、16年間に100校以上も減ったこととなります。人口減少の速度は増す一方となっております。このような時代に校長を拝命している私達は、時代や状況の急激な変化をも的確に見定め、教育の未来を見据えつつ、柔軟かつ創造的な学校経営を展開していく必要があります。今年度新たに仲間になった46名の校長先生方と共に、校長同士が繋がり合い、学び合い、学校経営のリーダーシップを確かに発揮できる校長として共に成長し合うことをここに誓いたいと思います。

現在、県では第7次教育振興計画、いわゆる7教振の策定に向けて鋭意検討が進められております。そのキーワードは「日本社会に根ざしたウェルビーイング」、生きがいや人生の意義などに関わる、将

来にわたる持続的な幸せの実現であります。私達校長も、すべての子ども達、すべての教職員の幸せを具現化すべく、未来に向けた学校の在り方を広く深く見通し、果敢に挑戦を続けて参りたいと考えております。

本日は、慶應義塾大学名誉教授の 富田 勝 様より「A I時代の人間の価値と教育」というテーマで興味深いご講演を賜りますとともに、「学校経営」「教育課程」「指導・育成」「危機管理」「教育課題」の5領域5分科会構成での発表とグループ協議、全体交流を行います。また、お昼には、山形大学理事・副学長の 出口 毅 様より、本県の教員養成及び教員の資質向上に係るお話をいただくことにもなっております。

時代の進展や社会の変化に伴う学校教育の課題は山積しておりますが、こうした中でも私達校長は、子ども達、そして教職員にとって希望の光をともし存在でありたい、そして、本日の研究協議会が県内の校長同士の知恵と力を結集する場となり、未来への希望の光を見出す機会となることを心の底から願っております。

結びになりますが、本研究協議会の成功に向けて、組織的・計画的に綿密で周到なご準備をしていただきました 阿彦 淳 実行委員長をはじめとする飽海地区校長会の皆様にご心からの感謝を申し上げましてあいさつといたします。本日一日、実りの多い研究協議会となりますよう、皆様、どうぞよろしく願います。



## 来賓あいさつ

山形県教育委員会

教育長 高橋 広樹 様  
(教育長代理 教育次長 加藤 淳一 様)

ご紹介をいただきました加藤でございます。高橋教育長の思いも含めて、代わって一言お祝いの言葉を述べさせていただきます。

本日は、第78回県連小校長会研究協議会の開催、誠におめでとうございます。これまで、学校経営の責任者である校長の果たすべき役割や指導性の在り方について研究を深め、闊達な意見交換を通して、本県の小学校教育の充実、発展のため、ひたむきなご努力を続けてこられましたことに敬意を表するものであります。その積み重ねは、例えば、小学校における時間外勤務の削減、いじめの認知件数の減少など、今日的な教育課題の解決に結びついているものと確信しております。また、長年にわたり本県教育の振興に対する多大なご功績をあげられて、ご勇退なされた先生方に対しまして、厚く感謝を申し上げます。今後とも健康に留意され、ますますご活躍いただきますとともに、引き続き本県教育の発展のために、温かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

さて、4月の公立学校長会議におきまして、高橋教育長が小学校の校長先生方に直接講演をして、4つの柱についてお願いしたところです。確かな学力の育成、いじめ・不登校の未然防止、危機管理、働き方改革の推進についてでありました。各学校の実情を的確に捉え、また、校長会において議論することによって、前向きな取り組みを継続しているものと存じます。本日、本県教育界のリーダーが勢揃いする機会であります。小学校教育の更なる充実という観点から、4つの柱の「働き方」の部分で触れておきます。若手教員の育成、教員のなり手不足、その一点に絞りまして、お願いも含め、お話させていただきます。

まずもって、校長先生方に本人達の思いも汲み取りながら、若手教員を丁寧にお育ていただいておりますことに御礼申し上げます。近年、学校が抱える課題が更に複雑化・高度化して、本県におきましても若手教員の精神疾患、早期に離職する、逃げ出したくなって一時的に行方不明になる、命に関わるような心配な事案につながるケースなどが少なからずありました。そのような、厳しい世界であることを覚悟の上、高い志をもった若者達が教職に就く、いわば金の卵達であります。その若者達をなんとしても守らなければならないという大きな、大きな課題がございます。その解決の手立ての一つとして、大卒新採育成支援事業を昨年度から立ち上げたところで

す。県教育委員会として、限られた財源、限られた人材確保、出来ることを少しでも前にという思いで進んできました。決して100点満点の制度ではないと承知しておりますが、先ほど触れました深刻な体験があったということ、校長先生方にも認識していただきたいと思っております。

本日、高橋教育長が出席できないというのは、新採教員が学級担任を担わなくても済むよう、教員基礎定数の拡大などを政府に、文科省に直接出向き、要望をしているためでございます。また、先日、教員採用試験の志願状況が公表されました。小学校は、依然として大変厳しい状況であります。先生方が前向きに、誇りを持って働き、時代を担う子ども達に囲まれ、そして、ロールモデルとなるような姿を示し続けなければなりません。身近な先生方こそ最強のリクルーターになり得るのだと思っております。どうか、校長先生方、若手教員が子ども達にとって豊かな社会を創る日本人の良きモデルとなるよう、引き続き学校全体で守りながら育てていただきますようお願い申し上げます。

今般は、先行き不透明な、将来の予測が困難な時代に入っております。このような状況にあればこそ、校長の豊かな指導経験や幅広い知識に基づくリーダーシップとマネジメント力が、これまでも増して重要となっております。県連小校長会は、お一人お一人の校長が抱える課題や悩みについてともに考え、支え合い、解決していく組織であると思っております。おのおのの実践・実績などを地域を越えて広く共有することで、よりよい学校経営に触れた研鑽、そして、建設的な提案へつなげるといった立体感のある関係によりメンバーシップが機能している組織であろうと思っております。5年ぶりに参集型で実施される本協議会では、今日的な課題に係るご講演、そして、5つの分科会で学校経営や危機管理への対応など、優れた実践をもとに議論を深められると伺っております。本日の学びが、校長先生方のエビデンスに基づく学校経営と勇気ある決断に結びつくことを期待申し上げます。

結びになりますが、本協議会の開催にあたり、主管となっております飽海地区小学校長会ははじめ、関係の皆様にも深く感謝申し上げます。本日、お集まりの校長先生方のご健勝と県連小校長会のますますの充実と発展、そして、実り多き協議会になりますようご期待をして祝辞といたします。

## 講演

## 演題

## 「A I時代の人間の価値と教育」



講師 富田 勝氏

(慶應義塾大学先端生命科学研究所前所長 慶應義塾大学名誉教授)

## 【略歴】

1957年東京生まれ。

慶應大学工学部卒業後、米カーネギーメロン大学に留学し、コンピュータ科学部で修士課程(1983)と博士課程(1985)修了。その後、カーネギーメロン大学助手、助教授、准教授、同大学自動翻訳研究所副所長 歴任。1990年に慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス開設とともに帰国。環境情報学部助教授、教授、学部長、評議員を歴任。2001年に慶應義塾大学先端生命科学研究所(山形県鶴岡市)を開設し、22年間所長を務めた。

米国 National Science Foundation 大統領奨励賞(1988)、日本IBM科学賞(2002)、文部科学大臣表彰科学技術賞(2007)、大学発ベンチャー表彰特別賞(2014)、山形県特別功労賞(2017)、第68回河北文化賞(2019)、第5回バイオインダストリー大賞(2021)、第27回安藤百福賞大賞(2023)などを受賞。鶴岡市名誉市民(2023)。

「ヒューマン・メタボローム・テクノロジーズ(株)」を創業し、2013年東証マザーズ上場。その後「Spiber社」「サリバテック社」「メタジェン社」など、計10社の慶應鶴岡発ベンチャーを創業支援。現在、慶應義塾大学名誉教授、一般社団法人鶴岡サイエンスパーク代表理事。

## 講演会に参加して

酒田市立一條小学校 石黒 久

富田先生の講演を聞いて、以前勤務した学校の、ある子ども(以後Aさん)を思い出した。

Aさんは、当時特別支援学級に在籍しており、集団で学習することを苦手としていた。教員との関わりも苦手としていて、いつも一人で学習していた。しかし、一人でどんどん学びを進められるほど理解力があり、テストではいつも高得点をとっていた。中学校3年生になり、高校進学を考える時期になった時、Aさんは普通高校への進学を強く希望した。実態を考えると、集団の中で学びを進めることは困難と思われたが、周囲が別の進学先を進めても、Aさんの考えは変わらなかった。

ある時、Aさんと進路について話す機会があり、普通学校に入学したい理由について、Aさんの思いを聞いてみた。Aさんは、涙を流しながら私に

こう言った。「普通になりたいから。」

みんなと同じことができなければ普通ではない。みんなと違うことはダメなことである。そんな意識をAさんに植え付けていたことに大きな衝撃を受けた。その当時の記憶が、富田先生の話聞いてよみがえってきた。

あれからしばらくたったが、現状はどうだろうか。私は、ここで新たに決意したい。「みんなと同じ」だけを求めるのではなく、多様性を認め、たくさんの方に安心して挑戦できる学校を築いていく。本研修会に集った仲間とともに。



## 第 1 分科会

## 学校経営

○教職員のウェルビーイングを目指した、  
魅力ある学校経営について

～ ICT を活用した新しい学校経営の実現～

米沢市立松川小学校 小池直人

研究協議とまとめ  
(趣旨)

社会を切り拓き「生きる力」をもった子供の育成のためには、特色を生かした学校経営と新しい時代の学校教育の実現が必要である。

本分科会では、ICT等の効果的な活用により、業務の効率化や活性化を進めるとともに、教職員の参画意識を高め、活力ある学校経営を推進するための校長が果たすべき役割と指導性を明らかにする。

## (研究協議内容)

## 1. 校務DXを推進する校長の役割

## (1) 校務の新しい在り方を提案する

○オンライン会議やクラウド活用の資料共有等、業務の効率化とともに、活性化に向けて有効的な会議の在り方や資料提示・管理を取り入れていく。

○外部とつながり、情報を収集し、活用していく。

## (2) 校務の新しい在り方を教職員と創造する

○若手教員の視点や校務DXにおけるアイデアを出し合い、今まで当たり前だと思っていたことを見直し、「若手と働きやすい環境づくり」を推進する。

## 2. 教職員の意識改革のための校長の指導性

## (1) 校務DXの有用性を実感させる

○校長自ら活用し、全職員がすぐに活用できる環境を整え、教職員が活用してみることでアイデアの集約、情報の整理等の利便性を伝えていく。

○教員自身の活用が、子供たちの活用につながり、資質・能力を育成することを示し、やってみたいと思わせる。

## (2) 教職員のICT等のスキルの個人差を埋める

○校長間で活用情報を共有し、他校に広め、人事異動等による環境の格差をなくしていく。

○「与えられる研修会」ではなく、若手教員の力が発揮できる「やってみよう研修会」をつくっていく。

(記録 米沢市立広幡小学校 田中真由美)

## 第 1 分科会に参加して

山形市立山寺小学校 高橋郁子

校務のDX化により教職員は「欠席連絡フォームを使うことで電話対応が少なくなった」等、業務の時短を実感し、ストレスチェックからはウェルビーイングの向上が図られていることが発表された。また学校間ではよい実践について、できるところから取り組んでみようと浸透が図られていた。

分科会では、米沢市の良い取組みに刺激され、それぞれの学校の実践を共有した。放課後の保護者への連絡について、緊急時以外はメールで行うようにしたら、より丁寧な対応ができるようになり、学校経営全体が安定しているとの事例があった。また、デジタル化を進めていくと、学級だより等、プレゼンテーションソフトで作成している先生方が増えていくと聞いた。紙であれば「新聞形式」が見やすいが、デジタルであればプレゼンテーション形式が見やすいとのことだった。

校務のDX化とは、ICT機器を使おうとすることで教職員の業務や組織、プロセス、学校文化を「見つけ直し」、時代に対応した教育を確立していこうとすることだと改めて実感した。

提言にもある通り、私も自校において児童の学びを強化する、児童の能力を発揮するための「ICT機器の活用」を研鑽し、学校全体のウェルビーイング目指して、学校経営に取り組んでいきたい。



## 第2分科会

## 教育課程

## ○豊かな人間性を育む教育課程の推進

長井市立平野小学校 服部 宏 司

## 研究協議とまとめ

## (趣旨)

「長井の心」を柱にしたこれまでの実践を分析し、「豊かな人間性」を育むカリキュラム・マネジメントを行うための校長の在り方について探る。

## (研究協議内容)

## 協議の柱

- ① 「豊かな人間性」をいかにみとるか
- ② 「豊かな人間性」育成のための校内外の組織構築と校長のリーダーシップ

## 〈協議の柱①〉

- ・子どもの5年後、10年後の姿で語る。
- ・成長を自覚できる子ども主体の活動とその活動を振り返る(成長を自覚する)場面を教育課程に位置付ける。
- ・子どもの声を拾い上げ、みとった姿(教師による価値づけ)を子どもに返す。

## 〈協議の柱②〉

- ・「つきたい力」がつく教育課程編成。
- ・学校教育目標(ビジョン)と学校評価の結果を教職員と共有する。
- ・行政や地域も含めた「チーム学校」として組織するための校長のコーディネート力。

(記録 長井市立豊田小学校 渡部美千恵)



## 第2分科会に参加して

上山市立中川小学校 武田 裕

「そもそも『豊かな人間性』とは？」第2分科会の参加を割り当てられた私が最初に感じた疑問である。教育基本法前文にも高々と掲げられている「豊かな人間性」を備えた人間の育成は、我々の決意しなければならないところである。しかし、その捉えは十人十色、千差万別なのではなかろうか。

西置賜地区は、長井市の標榜する「長井の心」を切り口とした実践を発表くださった。なるほど、まずは学校・保護者・地域がどんな子どもに育てたいのか、そのビジョンの共有をすることが肝要なのだろう。

グループ協議では、子ども主体の活動が鍵との話になった。子どもが夢中になるような活動だからこそ、子どものよさが現れ、教師はそのよさをじっくり見取ることができ、それを価値づけし、フィードバックできる。教育において、教師が主体化すればするほど、子どもは客体化していくことを肝に銘じなければならない。

そして、子どもが、自らの成長を自覚することも重要だ。そのための振り返りである。学習活動のまとめのみならず、自身の人間的成長を自覚したり、仲間の成長を認めたりできるような振り返りを工夫したい。

目指す子ども像を共有し、そのための手立てを勘案・実践し、PDCAサイクルを回すには、一人では困難である。だから「チーム学校」であり、チームメイトをつなぐのが、校長の役割ということになるのだろう。

この他にも沢山の学びを頂戴できた。発表者をはじめ、学びを共にした方々に衷心より感謝申し上げます。



## 第3分科会

## 指導・育成

○学校の教育力を高めるマネジメントの在り方  
～担任力を高める研修の推進と校長の役割～

大江町立本郷東小学校 矢作 誠

## 研究協議のまとめ

## (趣旨)

近年、教職員の大量退職・大量採用の傾向が続き、これまで脈々と受け継がれてきた教職員の知識・技能の伝承が困難な状況が起きている。教職員一人一人の指導力向上を図ることは喫緊の課題である。

そこで、校内における研修体制の充実、教職員の資質・能力の向上や若手教員やミドルリーダーの育成を図り、学校の教育力を向上させるための取り組みと校長の役割について研究していくこととした。

## (研究協議内容)

研究内容は以下の通りである。

- ① 西村山管内小学校長と若手教員(20～30代)を対象とした「研究・研修」に関する意識調査(アンケート調査)とその分析
- ② 若手教員のニーズを踏まえた各校における研修の実践とその情報共有
- ③ 研修の実践や情報共有を通じた若手教員のネットワークづくり
- ④ 若手育成のための校長の役割の再認識
- ⑤ 若手教員のニーズを踏まえた校長会主催の講演会の企画・開催

成果としては、若手教員の生の声を幅広く拾い上げたことや、一部地区で勤務校を超えて若手教員による同世代間の交流が図られたことが挙げられる。

一方、課題としては、実践と成果の積み上げや情報共有の具体化をどのように行うか検討していく必要があること、そして、若手育成を推進するための方針や方策を具体化し、必要に応じてアップデートしていく必要があるといったことが挙げられる。

分科会では、学校を超えて市・町単位で取り組む「若手育成の仕組みづくり」や「校長・若手ともにアップデートのために挑戦する姿勢の大切さ」などが話題になった。県内の校長が課題を共有し、認識を新たにできたことは、有意義であったと思う。

(記録 河北町立溝延小学校 宮部 卓)

## 第3分科会に参加して

尾花沢市立福原小学校 森 誠 司

どの学校においても若手教員が増えており、教員としての資質・能力の向上やそのための研修、および体制づくりは重要な課題となっている。第3分科会西村山の研究発表から、若手教員が求める研修と管理職が若手教員に必要なだと考える研修にはずれがあることが示された。

研究発表を受けてグループ協議が行われた。若手教員と管理職に意識のずれがあることを理解して、2つの柱に沿って協議することで、各学校や自治体で行われている実践が、この意識のずれを解消する実践になっていることがよく分かり、大きな収穫であった。

教員個々の得意・不得意や、今後どんな力をつけていきたいか、校務に対する要望などについて面談等を通して把握する。そして把握した情報から校内研修の内容や研修の形式(ミニ研修会、若手研修会等)などを職員と相談しつつ、あとは任せる。OJTのシステムが出来上がる。

今回の研究協議を通して、若手教員への支援のためや学校の教育力を高めるために実践したいことが明確になった。自らも研鑽を深め、校長としてのマネジメント力を向上させていくことの重要性を再認識できた。



## 第4分科会

## 危機管理

○教職員の危機管理意識を自分事に高め、  
課題に応じた対応ができる組織づくりと  
校長の役割

～子どもの命を守りぬくために～

鶴岡市立大山小学校 生田 弥 恵

## 研究協議とまとめ

(趣旨)

近年は地震だけでなく猛暑による熱中症等、学校として多様な危機対応を迫られる場合が増えている。同じ危機を繰り返さないために、これまでの課題に学ぶ姿勢や教職員一人一人が危機管理意識を自分事に高めることが求められる。このような視点に立ち、子どもの命を守りぬく学校にするための校長の役割について明らかにする。

(研究協議内容)

柱1：教職員の危機管理意識を自分事に高めるための校長の役割について

- 若手の教職員が増加し、過去の経験が引き継がれにくい状況である。これまでの経験をどのように伝えるか、個人としてだけでなく組織としても、対話を大切にしながら共有・蓄積の方法を工夫していく必要がある。
- 事例や避難訓練計画等について各教職員に考える機会を持たせるために問いかけ、議論をとおして課題解決の方策を検討するとともに、防災・安全教育を計画的に実施し、児童の意識や判断力を育成していくことが、学校全体で自分事に意識を高めるためには重要である。

柱2：課題に応じた対応ができる組織づくりのための校長の役割について

- 危機管理等マニュアルはつくるだけでなく、訓練後の反省からよりよいものに見直したりダイジェスト版で関係機関とも周知・連携しやすくしたりする等、組織として常に実効性ある内容にしていかなければならない。
- 人事異動があっても機能する組織を維持するために、校内だけではなく地域・保護者・専門家等の意見を取り入れながら、児童を守りぬく体制を校長がつかないでいく必要がある。

(記録 鶴岡市立鼠ヶ関小学校 齋藤 優子)

## 第4分科会に参加して

南陽市立宮内小学校 吉水 順一

第4分科会に参加させていただき、田川地区校長会での危機管理能力向上に係る取組みに触れることができ、多くの学びを得ることができた。

若手教員が増える中、様々な危機に対応できる資質や能力を育成することは重要である。「自分事」としてその事案をどうとらえ解決に導くか。組織の在り方や校長のリーダーシップが重要であること。様々なマニュアル・各種訓練をより実効性のあるものにするための指導助言の在り方。それらを、ワークショップやアンケートを通して自校の課題を洗い出し、次の一手へつなげていく方策など、数多くの学びを得ることができた。

危機管理能力を育てることは、教師を育てることにつながるため、校長はアンテナを高くし職員や関係機関との対話を通して日々研鑽を積む必要がある。田川地区校長会の皆様に厚くお礼申し上げます。



## 第5分科会

## 教育課題

## ○家庭・地域・異校種等との連携・接続の推進

天童市立天童南部小学校 高橋 徹

## 研究協議とまとめ

## (趣旨)

社会情勢の急激な変化に伴い、児童生徒に関する課題が複雑化し、異校種間での連携が必要とされている。また、9年間のスパンで実現していくため、校長が真の学校教育の具現化を図っていかなければならない。この視点から、校長の果たすべき役割と指導性について考察する。

## (研究協議内容)

- 小中連携のため、校長がリーダーシップを取り、中学校の教育目標とめざす15歳の姿を共有することが大切。そのために中学校区で授業研究会を開いている。
- 幼→小の連携として、小学校の理念を伝える。
- 「若手の会」を中学校区で立ち上げた。互いに支え合い、学び合えるようにしている。時には懇親会を開いて交流することでメンタルケアを図っていく。それを校長が発足し企画していく。
- 人材育成のためには、「任せる」ことが大事。研究会の都度、特別支援 Co. が特別支援の視点でアドバイスしている。本人の輝き、他教員の学びにつながっている。また会議や打ち合わせ時にワンコーナーを設け、実践交流する取組をしている。

## (まとめ)

- 9年間、12年間（幼保小中）で「めざす子供の姿」を共有し、目の前の子供の姿から戦略を持って取り組む。
- 関わる全ての人々がビジョンや目指す資質能力を共有し、任せながら人材育成をしていく等、校長のリーダーシップが重要である。

(記録 天童市立寺津小学校 佐藤美和子)

## 第5分科会に参加して

最上町立大堀小学校 加賀谷 成 秀

社会情勢の急激な変化への対応、令和の日本型学校教育の構築、働き方改革の更なる推進等、山積する課題を小学校だけで解決していくことは困難であり、地域や異校種との連携がますます必要となっている。コロナ禍が明け、教育活動のねらいや価値を見定め、どのように再構築していくのかに頭を悩ませてきた私にとって、今回の東村山地区の発表は大変興味深いものだった。

各校長の意識調査、実態調査を踏まえ、中学校区毎に学校間の連携強化と実践の積み上げがなされている姿に感銘を受けた。

天童第一中学校区では、交流会実施における中学校長の思いを、各小学校長が共有し、職員や子どもに伝えていくことで、事業の形骸化を防ぎ、より効果的な活動にすることができていた。改めて、情報や理念の共有の大切さを感じることができた。

山辺中学校区では、全町あげて人材育成に取り組んでいた。学校数減少による各校の負担軽減を図るために、校長や研究主任を通して、ねらいを共有しながら8つの事業を実施し、効果を上げていた。

グループ協議の中でも話題となったが、中学校区で思いを共有し、共通実践するのであれば、15歳の春を目指した一つの学校と考えられるのではないだろうか。校区内の授業研究会や子どもの交流も、単発的なものから継続・日常的という視点で再構築していくことが大切なのではないかと思った。





全体会



開会の挨拶



閉会の挨拶



第1分科会



第2分科会



司会



大会宣言



第3分科会



第4分科会



第3分科会



第4分科会



第5分科会

